

# 発信活動の 広報（後方） 支援！

イラストライター  
松本こーせい



全国建設研修センター創立五〇周年おめでとうございませう。私はセンターの機関誌『国づくりと研修』に「散歩考古学 大江戸インフラ川柳」を連載し、センターがJICA国際協力機構から委託されている発展途上国建設技術者研修の講師もつとめているので、これらの活動などを通して感じている、「発信広報」について記したいと思います。

私が取材したり逆にメディアの取材をうける際、名刺に記している「イラストライター」「散歩考古学」と「JICA講師」について必ず質問されるので、まずそれを説明しておきましょう。

イラストライターとは、自分で取材をして絵と文章で表現する者のことです。私は東京と故郷の宮崎を舞台に、江戸時代から戦中戦後までの「歴史再発見散歩」や、鳥瞰図・イラストルポの「図解もーせいのみやざき歴史発見」をテレビで放送中です。また「散歩考古学 大江戸インフラ川柳」にもある「散歩考古学」というのは、『歩いて愉しむ大江

戸発見散歩』刊行時に、私の視点と手法を出版社が「時間の地層をめぐって歴史を探る手法」として名付けたもので、私の各著書を取りあげた書評では次のように説明されています。

「街歩き取材の中で出会った、名もなき遺構や、何かの跡らしき気配といった、微かな時の断片を拾い上げて丁寧に考察。歴史的資料を集め」（『散歩の達人』）「それになつわる話を引き出し、その時代背景を調べ」（『東京人』）「江戸・東京の成り立ちを説き起こし」（『読売新聞』）て、「東京の今へ逆照射してみせる。土地の記憶から歴史に立ち至る『散歩考古学』である」（『国づくりと研修』）。

「JICA講師」については、土木の専門家でもないのになぜ？ というわけですが、研修生の中には日本の巨大プロジェクトを見学すると、「経済大国だから出来るんだ」と反発的反応をする人もいるので、「発展途上国時代の日本のインフラ整備」を講義してほしいというのが、私への依頼趣旨でした。講義の題材は、「大江戸インフラ川柳」と拙著『なぞのスポット 東京不思議発見』に掲載したもので、



JICAの研修で、葛飾北斎画「両国納涼」をもとに、当時の隅田川の様子などを説明する松本こーせいさん（左）  
「江戸のまちづくりⅡ日本橋架橋」「江戸時代の七分積金を活用した東京府の東京湾浚渫事業Ⅱ月島埋め立て築造」や「関東大震災復興と焼け残った両国橋

中央径間再利用の南高橋架橋」などです。

このような執筆や講義においては、受け手側の関心をひきつける工夫が必要で、私の場合は「好奇心」と「面白さ」ということになります。

JICAの講義を依頼された際、担当者から「講義のなかで、各研修生の母国の歴史を対比して入れるよう」指示がありました。

「〇〇さんのミャンマーが、イギリス領インドに併合されたのが一八八六年ですから、その一年後に東京湾滯筋の浚渫が始まったのです」といった具合です。講義中に自分の名前と国名を耳にした研修生は、何事かといった感じでこちらを見て耳をすませ、内容を聞いてうなずきます。これは講義の題材の年代を身近に感じさせるのにとっても有効でした。

そこで、これを参考に私も工夫してみました。江戸時代の説明をする際、冒頭で「Do you know the SAMURAI?」と尋ねることにしましたのです。すると研修生たちが「モチロン!」的笑顔で、刀を振り回し「ささ」をして興味を示してくれました。

また「大江戸インフラ川柳」は、江戸川柳を題材に社会資本の整備を考察していますが、これは滑稽味を特色とする川柳を使うことで、親しみやすい読み物をめざしたのです。

つまり執筆や広報には、発信する側が「伝えたいもの」を自覚し、「どのように伝えるか」という創意工夫が不可欠です。私へのJICA講義依頼の趣

旨と指示は、まさにこのような広報姿勢の好例といえるでしょう。

本誌『国づくりと研修』は、私にとって執筆の場であるだけでなく、土木分野の知識を得る貴重な情報源でもあります。

私が好奇心と探究心を刺激されるものに、「人と物の流れ」があります。なぜこの場所が繁栄し、もしくは消滅していったのか、その背景にある「人と物の集散に影響した交通路等の社会資本の整備廃止」事情です。

その意味でも、本誌には「後世の歴史の評価に耐えた、もしくは耐えられなかった社会資本としての土木建設事業」のレポート、また少子高齢過疎化と自治体予算削減の今日、「建設会社が社会の様々な場面でやっているボランティア活動状況」の記事を希望致します。



そして、「これからの半世紀も、技術をつなぎ、人をむすび、豊かで暮らしやすい国づくりに貢献していきます」という全国建設研修センターの、さらなるご発展を祈念するとともに、私なりの広報(後方)支援ができればと思っております。

5年間にわたり、『国づくりと研修』に20回連載された「散歩考古学 大江戸インフラ川柳」。毎回、楽しくわかりやすいイラストで紙面を飾った